聞

化

2版



日本が領有していてこのときの

文言が見られる。 島もあたえてしまった」云々の かったのに、われわれは二十二 本に近い五、六島やるだけでよ も、注においてであるが、「日 とえば一八七五年のいわゆる 領土をめぐっての正確無比な日 ならず千島列島をふくむ全北方 露関係史が記述されている。た (一八九五)には、この島のみ 「樺太千島交換条約」について チェーホフの『サハリン島』

記であって、北方領土の四島の のである。「五、六島」とは誤 し、その強欲をたしなめている は同胞のロシア人たちを客体化 がいた。「われわれ」にはチェ 見解と誤読した日本の大学教授 が、これをチェーホフその人の ことであり、この条約以前から ーホフは含まれてはおらず、彼 (二〇〇三、草思社) に記した 拙著『日露領土紛争の根源』 かも己の固有の地であるかのよ は異質のロシア音に変え、あた のにたいし、ロシア人はそれと 全部彼らの発音を保持している らを尊重した。日本語の地名が ば、日本人のほうがはるかに彼

サハリンを領有した」と記した。 本人に属し、日本人が最初に南 探検の権利は、疑いもなく、日 を賞賛しつつ、「サハリンの処女 地名よりもカラフトのそれが古 政府の造語である。日本に同情 いことを述べ、間宮林蔵の業績 したチェーホフは、サハリンの た。そもそも条約の名称は、外交 上の敗北を糊塗したかった明治 「交換」の対象とはならなかっ

留を強制したが、アイヌは日本 引揚げている。コリアンには残 条約のさい樺太アイヌたちは日 ロシア人の比ではない。「交換」 化においても、彼らとの近さは うに装った。言語においても文 た。その後また渡樺しまたもや 本人とともに北海道に引揚げ 人とみなし「引揚げ」を容認し

後ソ連にとってまことに都合の 『サハリン島』は第二次大戦

> 作成。これはシーボルトの『日 ル)河口を調査、精密な地図を

地図を公開していたロシアの航 訳書に添えられた日本製の略図 賛の手紙も同様である。ただし 削除されていた。同水域を調査 し、大陸とサハリンが地続きの 抄訳とはいえ全三巻の翻訳を口 海家、クルゼンシテールンの賞 かしそこでは林蔵の業績は全面 シアは最初に完成している。し 本』により欧米に伝えられた。

シーボルトとチェーホフに依拠せ 日露領土問題解決のために

ものがあったのは事実である。 しかしロシアとの対比でいえ への対応で日本人に批判される その他の少数民族である。それ この地域の先住民族はアイヌ 悪いものになった。それが真実 れる度に改ざんがなされてき である。このため新しく刊行さ であるために、彼らには苦いの た。邦訳は三種あるが、推奨し にはマミヤ・セト(瀬戸)の名

シア軍の砲火を受けた。一八〇 幕府部隊にあって一八〇六年ロ 書店のもののみである。 八年幕命により黒竜江(アムー 林蔵は四島のうちの択捉島の

を告発することであり、自著を が残されている。 を挙げることは、露訳の改ざん 挙げて引用しているが、シーボ 察知、ドイツ語原書に当たり、 著書『東韃紀行』からも書名を それを翻訳するようにして『サ ルトの名は伏せている。その名 ハリン島』を執筆した。林蔵の チェーホフはこれらの事実を

批判したロシアの悪しき強欲不

(ながせ・たかし=ロシア研究 正の伝統に連なる者である。 に背き、チェーホフが峻烈には、国籍を問わず、シーボルト

うるのは戦前訳を継承する岩波

たからである。事情は今も変わ 発禁処分にさらすことに連なっ

海峡発見から二百年にあたる。 ://homepage2.nifty.co とを述べた。四島へのソ連軍出 m/t-nagase/に露文ととも に掲載してある。本年は林蔵の ソ連占領下で苦難し引揚げたこ されていた。私は元の原稿に基 ージがある」と削除短縮され、 てあった報告は「『サハリン島』 で、私は「シーボルトとチェーホ 源』に詳述してある。越えて二 撃はそこからなされた。 http ついて話し、その際樺太の大泊 表題も変えられて報告集に収録 にはロシア人が愛好しない諸ペ ○○四年、メリホヴォでのチェ (コルサコフ)に生まれ育ち、 ノ」の表題で報告した。提出し すべては『日露領土紛争の根 二島および折半返還を説く人 ホフ没後百年記念国際学会